



## 慶應義塾大学ビジネス・スクール

# 介護保険事業所パッション

5

## — 震災時のマネジメント —

### (A)

2011年3月11日の昼下がり、その瞬間が訪れるまで、グループホーム（認知症対応型共同生活介護事業所）<sup>[1]</sup> パッションには、いつもと変わらない長閑な時間が流れていた。リビングルームでは、利用者<sup>[2]</sup> 8名とスタッフ3名がテレビを見ながら寛いでいた。 10

「そろそろ3時のお茶にしましょうか」

新人スタッフが声をかけたその瞬間、震度6弱の激しい地震が襲った。ガタガタと食器棚が動き出し、そうになるのを見て、他の男性スタッフが慌てて立ち上がり、その前面を押さえた。しかし、持ちこたえられない。 15

「あぶない、離れてください！！」

誰かの鬼気迫る声に、男性スタッフが飛びのくと、食器棚は大きな音を立てて倒れ、床に瀬戸物の破片が飛び散り、棚の上に置いてあったくす玉が利用者の足元まで転がっていった。テレビはいつの間にか消え、横揺れと共に地響きの音が益々大きくなっていった。 20

「怖い！」。部屋のあちこちから泣き声が響き、悲鳴が上がった。車椅子ごと横転しそうになる利用者。スタッフ達は、床にしゃがみこんで必死で支えながら、「大丈夫、大丈夫・・・」と声をかけ続けた。

<sup>[1]</sup> グループホームとは、生活介護サービスを伴う共同居住の場所を言う。認知症対応型共同生活介護とは、認知症の状態にある要介護者等に対して、その共同生活を行なう住居内において行なう入浴・排せつ・食事等の介護、日常生活上の世話、機能訓練等を指す。 25

<sup>[2]</sup> 一般的に、サービスの種類により「入居者」「入所者」「利用者」等の呼称が用いられているが、本稿では「利用者」を総称として用いる。

本ケースは、高木晴夫の指導の下、慶應義塾大学 HSR（ヘルスサービス研究会）の伴英美子、秋山美紀、渡邊大輔、中島民恵子、古城隆雄が公開資料および複数の被災施設での取材に基づき作成したものである。教育目的に沿って複数の施設の経験を合成しており、実在する施設の経験とは異なる部分がある。クラス討議での使用を目的としたものであり、特定の経営管理上の適切あるいは不適切を例示しようとするものではない

本ケースは慶應義塾大学ビジネス・スクールが出版するものであり、複製等についての問い合わせ先は慶應義塾大学ビジネス・スクールまで（〒223-8526 神奈川県横浜市港北区日吉4丁目1番1号、電話 045-564-2444、e-mail: case@kbs.keio.ac.jp）。慶應義塾大学ビジネス・スクールの許可を得ずに、いかなる部分の複製、検索システムへの取り込み、スプレッドシートでの利用、またいかなる方法（電子的、機械的、写真複写、録音・録画、その他種類を問わない）による伝送も、これを禁ずる。ケースの購入は <http://www.bookpark.ne.jp/kbs/> から。 30

Copyright © 伴英美子、秋山美紀、渡邊大輔、中島民恵子、古城隆雄（2018年6月作成）